

フランス語の隠れたしくみ 3
人とモノのミステリーは続く

東郷雄二

フランス語は人とモノを区別しない？

代名詞のなかで1・2人称は、話し手と聞き手を表わす記号なので、基本的には人をさす。問題は3人称である。3人称は話し手と聞き手以外のすべてをさす役割を担わされているので、いろいろと問題が起き、各言語はそれぞれ苦労している。

英語では人は he / she は i という対立がある。もっともどちらも複数では they となり、人・モノの区別はなくなる。「複数にする」ということは、単に「数を増やす」ことではなく、様々な「区別をなくす」ことでもあるのだが、この点については今回は触れない。

フランス語では3人称の主語代名詞 il(s), elle, English とはちがって人もモノもさすことができる。誰でも初級文法の初めにそう習う。

- (1) O est le directeur dans son bureau. (il=le directeur)
「部長はどこだい?」「オフィスにいるよ」
- (2) O est mon stylo sur le bureau. (il=mon stylo)
「僕の万年筆はどこだ?」「デスクの上にあるよ」

直接目的格の代名詞も同じく人もモノもさすことができる。

- (3) Tu connais Marie ? la connais depuis longtemps. (la=Marie)
「マリー知ってる?」「うん、ずっと前から知ってるよ」
- (4) Tu regardes la télé ? la regarde pas souvent. (la=la télé)
「テレビは見る?」「いや、あんまり見ないな」

雲行きが怪しくなって来るのはここからである。間接目的格の代名詞 lui / leur たいていの場合には人をさし、モノをさすことは難しい。朝倉季雄先生の『新フランス文法事典』(白水社)には、「原則として lui, leur は物について用いられる」とあり、次の例があがっている。

- (5) Il m'a répondu.
「彼は私に手紙をくれたので、私は彼に返事を書いた」
- (6) Cette lettre n'a pas de réponse.
「その手紙は無礼だったからそれには返事を書かなかった」

ただしこれに続けて、「間接目的語 +人 を取る動詞のなかの一部については、luが人をさすと解される恐れがないときには物についてもluを用いる」という解説がある。確かに次の例では luが人をさすと誤解される恐れがないばかりか、本来は「場所」を表わす yを使うとおかしな文になってしまう。ここはどうしても luなのだ。

(7) La lune baignait l'édifice d'une blancheur aveugle.

「月の光は一面に差しこみ、部屋はまばゆいばかりに白かった」

しかし私などこの説明を見ると、「うーむ」と考え込んでしまう。まず第一に、主語と直接目的語までは調子よく人もモノもさすことができた代名詞が、なぜ間接目的語になると手のひらを返したように「原則として人」しかさせなくなるのかという疑問が湧く。つぎに、「間接目的語 +人 を取る動詞のなかの一部にはモノにも *l*を使う」とあるが、なぜ動詞の「一部」に限られるのか、また「一部の動詞」とはどんな動詞なのかという疑問も湧く。ここは文法学者の出番でしょう。

事態への関わり と人・モノの区別

本誌200年2月号の連載記事「見える文法、見えない文法」で西村牧夫さんがこの疑問に答えている。西村さんはかなり過激で、フランス人でも *l*は人、*y*はモノと思こんでいるが、「それは正しくありません」と一刀両断のもとに言い切っている。清々しい態度である。*l*と *y*の使い分けは人とモノの区別ではなく、「出来事の受け手として主体的な役割を担っているかどうか」の区別だというのが西村さんの主張である。いささかわかりにくいかもしれないので西村さんの例をあげよう。代名詞の訳の不器用さには、この際目をつぶっていただきたい。

(8) Elle lui ressemble. (*lui*= la reine Margot)

「彼女は彼女 (マルゴ―王妃)にそっくりだ」

(9) Elle y ressemble. (*y*= une reine)

「彼女にはそんな (王妃様みたいな)雰囲気がある」

彼女がマルゴ―王妃に似ているのなら、関係をひっくり返してマルゴ―王妃も彼女に似ていると言える。両者は対等の関係である。ところが彼女に王妃様みたいな雰囲気があるからといって、ひっくり返して王妃様だったら彼女に似ているとするとおかしい。(8の *l*は(9の *y*よりもより主体的な役割を果たしているというのが西村さんの説明の骨子である。*lui*人 と誤解されたのは、ふつう人はモノよりも主体的な役割を果たすことが多いからに過ぎない。

私はこの説明にほぼ同意するので、これ以上くわしくは論じない。ただ、西村さんが説明していないのは、主語・直接目的語までは人もモノもさせるのに、なぜ間接目的語になるとそうではなくなるのかという疑問である。

これは動詞の表わしている 事態 への 関わり方 の濃淡による。動詞の表わす 事態への関わり方の深さ の順に並べると次のようになる。

(10) 主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > その他の補語

主語は多くの場合「事態を引き起こす主体」であり、事態への関わりが最も大きい。そりゃそうでしょう。人を殺す人がいなくなれば、世に殺人事件などというものはなくなるのだから。直接目的語は「事態の影響を直接に受ける立場」なので、関わりは次に大きい。人を殺す人がいなくなれば、殺される人もいなくなる道理である。

間接目的語になると、移動するモノの受け取り手や、利益や被害を被る立場を表わすので、事態への関わりはより間接的だと言える。動詞の表わす 事態への関わりが深い立場を「中心」、浅い立場を「周辺」と呼ぶことにすると、次のような隠れたしくみがフランス語にはあるようなのだ。

「中心では人とモノを区別しないが、周辺に行くほど区別する」

私は寡聞にして、フランス語にこのようなしくみがあることを述べた文法書を知らない。このしくみはフランス語における 事態表現のしくみ と深い関わりがあるのだが、これはまた別のお話である。

強勢形代名詞は人をさす

さて、長い前振りだったがここからが実は今回の話の本題なのだ。(10の式で最も周辺にあるのは「その他の補語」である。これは 前置詞+名詞 代名詞 という形式をとる。代名詞は「強勢形」 lui / を使う。(10の式が正しければ、ここで人・モノの区別がいちばんはっきりと見られるはずである。予測どおり強勢形 lui / ellは人をさし、モノをさすことはむずかしい。次の文はどれもおかしい。

- (11) Je te passe un crayon lui *Ecris avec
「鉛筆を貸してあげるから、それで書きなさい」
- (12) *Prenez une chaise et asseyez-vous sur
「椅子を取ってそこに座りなさい」
- (13) Il y avait un ch ne. *Paul tait assis c t de
「柏の木があった。ポールはその傍らに座っていた」

ではどうしてもモノをさしたいときどうするのか。Ecris avec. / Asseyez-vous dessus. Paul tait assisとし、代名詞を省略し前置詞だけ残すか、dessusのように意味的に対応する副詞を使う。事態への関わりが最も浅い その他の補語 の場合、モノをさす代名詞はフランス語にはないということになる。

実は事情はもう少し複雑で、『新フランス文法事典』には強勢形代名詞がモノをさす例がいくつかあがっている。

- (14) Mais ma linde est en haut ?
「(設計図を見ながら)私のシーツ・タオル類置き場はやっぱり2階なの?」
- (15) On dirait qu'il n'y a que le bonheur sur la terre. H bien, oui, je lui
「まるでこの世に幸福しかないみたいね。ではよくて、わたしは幸福から逃げ出したいのよ」

(14は同格での強調の例で、名詞と隣り合っているとモノをさすことができる。(15)は一種の擬人化である。これらは例外的ケースで、強勢形はやはり人をさすのが基

本というのが私の考えである．これはなぜなのだろうか．この連載の前々回で，フランス語の代名詞 *il* / は日本語の「彼 彼女」とは異なり，「コトバをさす記号」だと述べた．ところが強勢形の *lui* / は例外で，コトバではなく「人をさす記号」だというのが私のアイデアなのだが，今回はくわしく説明する紙幅が尽きた．

(とうごう・ゆうじ)